

# 県中教研

## 特別支援教育部会だより

第 39 号

発行日 令和6年3月  
発行所 富山市千歳町1-5-1  
富山県中学校教育研究会  
編集責任者 宮城 渉  
題 字 金山 泰仁 先生

### 一人一人の実態を生かした支援を

指導主事 大道 正敬

今年度、生徒一人一人の実態把握を基に、興味・関心を高めるよう工夫された授業を数多く参観しました。

研究大会では、人前で話すことを苦手としている生徒が、クイズの出題者として前に立ち、堂々と他の生徒に問題を出すなど、最後まで生き生きと活動する姿を見ることができました。責任感があるという生徒の強みを生かし、生徒に役割をもたせるなど、多くの支援があったからこそその姿です。また、生徒のがんばりをすかさず認め、励ます先生の姿に、日頃から生徒に寄り添い、成長を願って温かく関わる姿勢がうかがえました。よりよい支援の方法を試行錯誤してこられた先生の努力の積み重ねが、前向きなコミュニケーションを行い、自己肯定感を高めるという本時の目標の達成と、子供たちの輝く笑顔につながっていました。

中学校学習指導要領解説編には、「生徒一人一人の障害の状態等により、学習上又は生活上の困難が異なることに十分留意し、個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を検討し、適切な指導を行うこと」とあります。教師には、一人一人の子供の実態を丁寧に把握し、学習や生活場面での生徒の教育的ニーズを意識して指導内容や指導方法を工夫することが求められています。先の研究大会の授業では、担任の先生はもちろんのこと、学校をあげて、複数の目で実態を把握し、支援の在り方を検討されていたと感じました。そうした学校全体で取り組む特別支援教育の体制が、今後も広がっていくことを期待しています。

先生方には、生徒の自立と社会参加に向けた指導と支援を目指し、各校の特別支援教育の要として、より一層ご尽力いただきたいと思います。

(西部教育事務所)

### 一人一人の成長を願って

部長 宮城 渉

今年度は、「特別な支援を必要とする生徒の能力や可能性を伸ばし、自立と社会参加を推進する指導はどうあればよいか」という研究主題の下、「生徒一人一人の実態に応じ、興味・関心や意欲を高める学習過程の工夫」という副題を設定し研究を進めてきた。

研究主題の解明に当たり、第67回研究大会では、生徒の教育的ニーズに応じた指導過程の工夫に重点を置いた授業が東西両地区で行われた。

東部地区では、富山市立月岡中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級において道徳科の授業が公開された。読み書きに課題のある生徒の負担を軽減することができるよう、タブレット端末を用いて書く活動に取り組みさせていた。生徒同士で意見を共有し合う場面では、電子黒板に示された意見を基に主題について考えを深める生徒の姿が見られた。

西部地区では、高岡市立芳野中学校の自閉症・情緒障害学級において自立活動の授業が公開された。生徒がコミュニケーションの楽しさを知るとともに、他者との適切なコミュニケーションの在り方について考えることができるよう、ゲーム的要素を取り入れた活動が設定されていた。また、必要に応じて視覚的な支援も準備されており、生徒が主体的に学習を進めようとする姿が見られた。

どちらの授業も生徒一人一人の実態に基づいた支援や今後の生活に役立つような活動が工夫されており、生徒たちは達成感を感じていた。今年度は、多くの教員が研究大会に参加して活発な協議が行われ、生徒たちへの熱い思いを感じることができた。今後も生徒の十分な学びを確保することができるよう、特別支援学級だけではなく、通常の学級や通級による指導においても一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を一層充実させていきたい。

(高・福岡中)

# 第67回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区(富山市立月岡中学校) 令和5年10月17日(火)

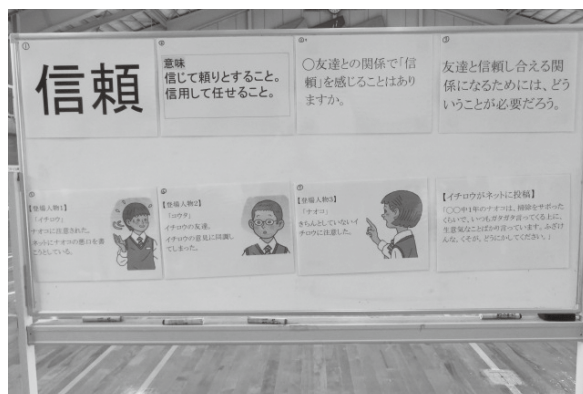
研究授業は、自閉症・情緒障害特別支援学級(1年生男子2名)で、木田智也教諭による道徳科の授業「短文投稿サイトに友達の悪口を書くと(新しい道徳I)」が行われた。授業内容は、ネットに同級生の悪口を投稿しようとする友達を心配する主人公の心の葛藤を通じて、信頼し合える友人関係とは何かを考えるものであった。参加者は、事前に撮影された授業の様子を協議会場で視聴した。



授業では、ロールプレイを通して登場人物の気持ちを想像することで、生徒が自分のこととして問題を受け止め、友達のためにどう行動するとよいかを考えることができた。また、書く活動にタブレット端末を取り入れることで、読み書きに課題のある生徒の負担を軽減し、どの生徒も自分の考えを記述することができた。生徒同士で意見を共有し合う場面では、電子黒板に示されたこれまでの意見を踏まえながら対話を重ねており、主題について考えを深める生徒の姿が見られた。

小櫻昌子指導主事(東部教育事務所)から以下の助言をいただいた。

- ・導入で「信頼とは」と問い、道徳的価値への問題意識を高めるような投げかけが工夫されていた。
- ・生徒の実態をもとに授業展開が工夫されていた。考え、議論する道徳に内容の理解は不可欠であるため、音声ファイルによる範読やあらすじを確認することは有効であった。
- ・自分の考えを書く時間が確保されていた。書くことに苦手意識のある生徒への代替手段が用意され、入力したものを共有することで、考えを広げたり深めたりすることができた。
- ・ロールプレイを採用することで、自分事として捉える機会になった。実施の際は、ねらいを明確にすることが重要である。
- ・ヒントカードを活用することで、自分の意見を表現できたという達成感・成就感につながった。
- ・「分からない」という生徒の回答に問い返したり、登場人物の立場を代えて考えさせたりすると、中心発問にさらに迫ることができたかもしれない。
- ・個々の生徒の実態を把握して、見通しをもった指導・支援に当たってもらいたい。



部会協議①では、4～5人のグループで協議を行った。授業の様子を視聴して気付いたことや研究主題との関連について、現任校での取組を振り返りながら意見交換・情報共有を行った。効果的なICTの活用について学ぶことができたという声が多かった一方で、少人数の特別支援学級で意見を交流することの難しさに言及する意見もあった。

部会協議②では、富山県発達障害者支援センター「ほっぷ」相談員の北川忠先生より「発達障害がある生徒の思春期における支援のポイント」について、講演いただいた。

巢山 普照(中・雄山中)

# 第67回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（高岡市立芳野中学校） 令和5年10月17日（火）

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生5名）で、加賀見智子教諭による自立活動「お題当てゲームを通して、コミュニケーションを楽しもう」が行われた。教室にカメラを設置し、参観者は別室で授業の様子を視聴した。

授業内容は、生徒が出題者（1名）と回答者（複数名）に分かれ、回答者は質問を繰り返



しながら出題者のカードに書かれている題目を当てるといふゲームを行うことで、自分と相手がいることで成り立つコミュニケーションの楽しさを知るとともに、他者との適切なコミュニケーションについて考えるというものであった。

授業では、ゲーム的要素を取り入れることで生徒はだんだんと興味をもって意欲的に取り組み、自分と相手との適切なコミュニケーションを楽しんでいた。また、答えを見つけられず不安そうな生徒には、ヒントや教師の声かけ等があることで、仲間と協力して答えを見つけようと頑張っていた。振り返りでは、振り返りの項目を黒板に貼っておくことで、自分ができたことに気付き、自分の学習の達成度を顔の表情マークから選ぶことができた。また、それぞれができたことを互いに認め合う場面が見られた。

部会協議では、「特別な支援を必要とする生徒の能力や可能性を



伸ばし、自立と社会参加を推進する指導はどうあ

ればよいか」の研究主題解明に向けて、生徒の学びを事実に基づいて正確な評価を行い、「子供を見る力」を高め、継続な授業改善につなげられるようにすることを目的として話し合いを行った。

大道正敬指導主事（西部教育事務所）からは、

- ・生徒一人一人の実態を細かく捉えて指導内容を設定し、生徒が興味、関心を高めながら活動に取り組めるように支援を考えながら授業を進めていた。
- ・生徒の弱みだけでなく、長所や得意にも目を向けた上で、指導案を作成し、生徒を励ましたり褒めたりする場面が数多く見られ、生徒の意欲につながっていた。
- ・振り返りの場面では頑張っている自分を確認したり、過去の自分より成長していることに気付いたりして自己肯定感を高めていた。
- ・自己選択や自己決定の場を設定することで、生徒のできることを引き出したり、教師の肯定的な評価で生徒の意欲を高めたりして、効果的であった。
- ・個々の生徒の目標や評価の観点を考えておき、生徒の活動に対する具体的な声かけや対応を考えておくことで、教師側にゆとりが生まれ、一人一人の生徒に寄り添い、励ましや称賛を与えることができていた。
- ・必要に応じていろいろな場面で視覚的な支援を準備し、教師が言葉を出さなくても、生徒が主体的に学習を進められるようにしてよかった。
- ・自己の振り返りだけでなく、学級の仲間の頑張りを認め合う場面があれば、他者評価でさらに自分の自信につなげることができるので、日頃から自己評価と他者評価を合わせて行っていくとよい。等の助言をいただいた。

藤田 恵三（射・射北中）

# 中学校生徒の行動・学習支援の実際 —特別支援学級を中心に教室でできること— (第67回西部地区大会での講演概要)

上越教育大学大学院臨床・健康教育学系  
発達支援教育実践研究コース(特別支援教育)教授 村中 智彦

## 1 本日の授業から

おそらく授業者は、生徒たちとのコミュニケーションが、少しくましくなかったと感じているのではないかと。生徒たちと「質問します」、「はい」といったやり取りを行うとよい。このような予告指示を行うと、「これから、始めるのだな」と指示が通りやすくなり生徒も心がまえをもつことができる。生徒2人のやり取りではなく、3人のやり取りにしたほうがよかったかもしれない。

また、質問を担当する生徒が、何を質問したらよいか理解困難であった。質問者が質問するためのカードが用意されていたので、最初の2、3回は順番にカードをとって質問していき、慣れたらカードなしで自分で質問を考えさせるというステップを踏めば、もっとスムーズに学習できたと考えられる。

## 2 知的境界やギフテッドの生徒への学習支援

発達障害(学習障害、ADHD、ASD)ではないけれど、個別支援が必要な知的境界にある生徒は少なくない。特別支援学級に在籍することが困難で、通常学級の中で境界知能の生徒に対してどのようにして学習支援するかは、今日の問題点として残っている。

障害は、なくなるということはない。少し改善するということが大切である。アンガーマネジメントは、「怒り」の感情から、「攻撃」の行動へのつながりを断ち切るということ。「怒り」が高まった場合、その対象から離れて別の活動に従事していると、「怒り」が抑制されることはよくある。

不適切な行動が起きたとき、叱る対応をすることは一般的かもしれない。特に家庭の子育ての場面では多くなる。不適切行動に対して叱責や注意するやり方は、最初は効果があるけれど、次第に

効果が薄れて効かなくなる。叱っても不適切な行動は減らない。叱っているつもりが、かまっていることになっているかもしれない。このような事後支援ではなく、予防支援に重点を置くことも大事である。不適切な行動を注意や叱責するのではなく、望ましい行動や適切な行動が生じたとき、また、不適切な行動がいつもより少なかったときは、それを見逃さず、注目して、「いまのは良いです。ありがとう」等のフィードバックを返すことに重点を置いた支援が有効である。

学校の授業は退屈で面白くないと感じている生徒がいる。優秀児の指導としてとらえるのではなく、知的機能の高い生徒への個に応じた指導としてとらえ、対応する。

数学で繰り返し教えても、同じ間違いを繰り返してしまう。簡単な公式もなかなか身に付かない生徒に対しては、課題の量を絞って、学習に取り組む敷居を低くする。例えば、5問終わったら「できました」と報告させる。分からないときは、「教えて」と教示要求させる。できないときに、「遂行欠如」(できるがしようとししない)のか、「スキル欠如」(スキルそのものの未獲得)なのかを評価し、必要な手立てを講じる必要がある。

坪本 吉史(砺・出町中)

